

【問 題】 次の文章を読み、左の二つの間に答えなさい。答えは解答紙に書くこと。

秋晴れの一日、公園でくつろぐ。遠くには城跡も見え、池のさざなみの輝きがまぶしい。公園に似合うのは、幼児と母親（父親）、老人、浮浪者、それにカップルたちだろうか。ベンチに座って携帯電話で話す背広姿のサラリーマンなどがあると、どうも落ち着かない。緑や文化財、それに昔から変わることはない世代の姿、子どもから若者へ、夫婦となり、そして老人へと繰り返す生命の循環には、せわしない現代ビジネスの雰囲気は場違いなような気がする。

すべり台に乗って乱暴に遊んでいた男の子を、女の子が注意する。

「そんなに足でドンドンと踏みつけたら、すべり台さんが痛いよ」

何気ない光景だ。しかし、大事なことを含んでいる。

この子にとって、すべり台は単なるモノではない。それは痛みを感じる感性をもつ存在だ。言い換えれば、身体をもつわけだ。自分が乱暴に踏みつけられると痛い。きっとすべり台も男の子からドンドンと元気よく足踏みされて、自分と同じように痛いのだろうという共感の力（想像力）が働いている。

このように人は、物体に対しても、自己の身体を投影し身体あるものとして扱う。そのことによって、自己の身体が感じる感覚を対象に対しても感じ、感覚を共有することができる。

これは昔から「擬人法」と呼ばれ、詩や小説などではおなじみの表現だ。生活の場では幼児の表現とされ、歴史的・社会的に見ると、原始人、未開社会の人々に顕著な表現として私たちは扱いがちだ。まるで先進国に住む現代の私たちには、そんな幼稚な表現などもはや不要であるというかのように、子どもの世界や文学作品、あるいは遠く離れた未開の社会の中に追いやって一顧だにしない。

だが、幼児や未開社会や原始時代の人々、そして、現代に生き残る詩人の未裔たちが使う擬人法だからこそ、その力は人間にとって本質的で根源的なものであることを示唆しているといえるのではないだろうか。

幼児の絵本に出てくる車や飛行機は、ヘッドライトが眼になったりして擬人化されている。石や草花も同様だ。こうした擬人化は幼児だけではなく、人類がアニミズム（精霊崇拜）の世界に生きていた時代はみなそうだった。その伝統は、もちろん今日にも一部残されている。

たとえば、琉球弧から九州を経て瀬戸内海にいたる西日本の木造漁船には、舳先に目がつけられていた。それは、機能的にはまったく意味がない。ただの装飾なのだ。もともとは、海の魔物や悪霊を退治するという呪術的意味があったとされる。しかし、由来を意識している漁師も船大工もとくにおらず、一つの様式として定着していた。

漁師の子どもとして育った私にとって、眼のある船は、それぞれ人間のように違った表情をもっていた。気の荒い漁師の船はやはり気が強そうに見える、寡黙な私の父の船は「若竹丸」という名にもふさわしく、穏やかで優しそうな表情をしていたのが子ども心にも不思議だった。

（1）奄美・沖縄・先島諸島などを総称して表現する言葉。

（出典 清水 満 『共感する心、表現する身体』二〇〇四年 新評論）

【問一】 本文の要旨を三百字以内でまとめよ。

【問二】 共感についてあなたの考えを三百字以上、五百字以内で述べよ。